

# 『洛中洛外図屏風』に描かれた中世京都の商人と職人

—「歴博甲本」人物データベースの活用—

大 藪 海\*

## 1. はじめに—中世の商人と職人—

中世において商売は、定期市にあわせて設えられた仮設店舗、もしくは振売による行商により営まれていた。しかし、特に鎌倉時代末期から室町時代の京都や奈良などの都市部においては、次第に見世棚と称される常設店舗が多くみられるようになった。見世棚とは、通りに面した場所に家屋から棚を突き出して設けたもので、その棚に商品が陳列されて販売されていた。これが天正年間(1573~1591)前後には、棚が撤去されて店内部に商品を陳列する方式に変化する<sup>1</sup>。

そのように商売方式を異にする振売と常設店舗は、商圈をめぐって対立を繰り返した。康永2年(1343)の京都における綿本座(常設店舗による販売を行う商人による座)と綿新座(振売商人による座)の争論は、その対立のなかでも著名なものである<sup>2</sup>。そうした対立は戦国期に至ってもみられ<sup>3</sup>、さらに奈良でも起きている<sup>4</sup>。

職人についても、商人の間にもみられるような座が組織されていたと考えられている<sup>5</sup>。その一方で、座のような組織は京都や奈良のごく一部にしか存在していなかったことも指摘されている<sup>6</sup>。

しかし商人・職人いずれにおいても、信頼するに足る文字史料は限られている。そのため、特に職人については、1980年代を頂点として以降、研究状況は決して盛んとはいえない<sup>7</sup>。

限られた文字史料を補う、あるいはそれ以上の

役割を担っているのが、考古史料や絵画史料である<sup>8</sup>。近年提唱されている、15世紀に「生産革命」が起きていたとする見方なども、文献史料と考古史料の双方を分析して得られたものといえよう<sup>9</sup>。絵画史料については従来以上に研究が深化し、「熟成期に入った」とさえ評価されている<sup>10</sup>。そのような絵画史料の一つである『洛中洛外図屏風』は、中世後期京都の商人や職人の姿を視覚的に理解できる貴重な史料として、すでに多くの研究で活用されている<sup>11</sup>。

こうした研究状況をふまえて本稿では、『洛中洛外図屏風』、そのなかでも特に現存最古とされる「歴博甲本」(図1)を素材として、中世京都の商人や職人の姿についてみてみたい。ただし、すでに「歴博甲本」については詳細な読み解きがなされているため<sup>12</sup>、本稿での検討は屋上屋を架すものである。しかしそうした読み解きを総体的に捉えることにより、新たにみえてくるものもあるであろう。

なお、中世においては定住の商人と職人を「町人」と称し、行商人を「商人」と呼んで区別していたとされる<sup>13</sup>。しかし本稿では、行論の都合上、その形態にかかわらず商売を行う者を「商人」、賃金を得て手工業を行う者を「職人」と呼称する<sup>14</sup>。

## 2. 『洛中洛外図屏風』とは

### 2-1. 「洛中」と「洛外」

屏風の題にも用いられている「洛中」や「洛外」

\*お茶の水女子大学助教

という表現は、中世京都の中心部とその周辺域を表す言葉である。その言葉が意味する地域は時代により多少の変動がある。たとえば室町期において「洛中」は、東朱雀大路以西・大宮大路以东・七条以北・鞍馬口以南であったと考えられているが、それが戦国期には縮小してしまっていたことが指摘されている<sup>15</sup>。

しかし『洛中洛外図屏風』は、中世や近世の京都を「洛中洛外」と一括りにして描いたものであり、むろん厳密な定義に基づくものではない。そのため屏風により描かれる範囲は一定ではないが、中世の『洛中洛外図屏風』に限ってみれば、右隻に内裏と下京とその周辺を、左隻に幕府と上京の西側とその周辺を描いている<sup>16</sup>。一方、近世に入ってから制作されたものは右隻に内裏や下京を、左隻に二条城や上京を描いているため、前者の構図を「第一定型」、後者のそれを「第二定型」と呼んで区別している<sup>17</sup>。現存する『洛中洛外図屏風』は100点を超えるが、そのうち第一定型に属するのは、わずか4点のみである<sup>18</sup>。

## 2.2. 「歴博甲本」と人物データベース

「はじめに」で述べたように、本稿で扱う「歴博甲本」は現存最古の『洛中洛外図屏風』であり、第一定型に属する。これに先立つものとして戦国

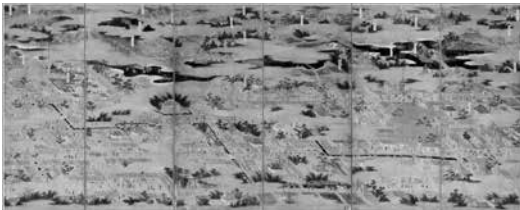


図1 「歴博甲本」(上段が右隻、下段が左隻。)

期に越前を支配していた朝倉貞景が発注したものがあつたと考えられているが、現存していない<sup>19</sup>。

「歴博甲本」には、16世紀初期の洛中洛外の様子が描かれている。小島道裕は、屏風中に描かれている人物の分析からさらに年代を絞り込み、大永5年(1525)4月から10月までの景観を描いたものと考え、制作年代もほぼそれに近い時期とみている<sup>20</sup>。描かれた人物の総数は1,426人(うち1人は一度描かれた後に塗りつぶされている)で<sup>21</sup>、現在その一人一人について、データベースによる検索が可能となっている(以下、「データベース」はこの人物データベースを指すものとする)<sup>22</sup>。本稿では、このデータベースを使用して、商人や職人が「歴博甲本」にどのように描かれているかを確認したい。

## 3. 「歴博甲本」にみえる商人と職人

### 3-1. 常設店舗による商売

データベースで「商人」と検索しても、2例(甲\_右\_1\_121、甲\_左\_3\_97)しか出てこない<sup>23</sup>。これは「身分・職業等」を立項する際に「商人」の定義が曖昧であったために生じた事態であり、実際にはより多くの商人が描かれている<sup>24</sup>。

たとえば「売る」という行為で検索をしてみると、18人が検出できる。そのうちの1人である(甲\_右\_5\_96)は、町通(新町通)の見世棚を持つ家屋に座り、商品を置いた見世棚を介して肩衣袴姿の武士らしき人物と会話している(図2)。この人物画像の縮尺を変更して、同じ通りに建てられている他の建物についてもみてみると、商品を置いた見世棚を持つ建物や(図3)、商品や人物は描かれていないものの見世棚は描かれている建物が確認できる(図4)。また、これらの家屋には暖簾が掛けられているが、同じ通りにありながら見世棚がない家屋の入口には、簾が掛けられている(図5)。例外もあるが、暖簾が商家であることを示す象徴となっていたといえよう<sup>25</sup>。そのため、見世棚

がないにもかかわらず入口に暖簾を掛けている店舗（図6）については、小売業ではなく卸売業に従事していたのであろうと推測されている<sup>26</sup>。

見世棚に並べられている品物に注目してみよう。先ほどみた（甲\_右\_5\_96）では食器などが販売されていたが、同様の店舗は他にもみられる（甲\_左\_3\_97が描かれている場所など）。また、人物は描かれていないものの、室町通には簪などの装身具を販売する店舗が（図7）、小川通には弓を販売する店舗がある（図8）。魚介類や鳥、果物や饅頭といった食品も商品としてみえ（図9～12）<sup>27</sup>、見世棚では日常生活に必要な多種多様なものが販売されている様子が描かれていることがわかる。

特に多いとみられる店舗は扇屋である。たとえば（甲\_左\_4\_70）は小袖姿の女性であるが、小川通に見世棚を持つ店舗を構え、見世棚には扇を並べている（図13）。さらにその小川通と交差する北小路通にも、人物は描かれていないものの見世棚に扇が並べられている（図14）。（甲\_左\_5\_62）が座っている町屋では屋内に棚を設けており、その棚には扇の部品である骨や扇面に使用する和紙らしきものが描かれている。（甲\_左\_5\_62）は台を前にして座っており、なにやら作業をしている。これらのことから推測するに、この町屋は扇の製造直売所といったところであろうか（図15）。

### 3-2. 行商（振売）による商売

行商は、籠や桶を釣り下げた杓（天秤棒）を担いで売り歩くスタイルが基本である（甲\_右\_2\_125、図16）。データベースで「振売」と検索すると25人が結果としてみえるが、その結果には振売から商品を購入する人物も含まれているので、そのうち20人ほどが実際の振売である<sup>28</sup>。多くは杓を担ぎながら歩く姿で描かれているが、呼び止められたのか、町屋の前で住人を相手に商売する姿もみられる（甲\_右\_3\_80、図17）。町屋に立てかけた竹を指さし、住人に購入を勧めているかのような、訪問販売を思わせる描写もなされてい

る（甲\_左\_5\_92、図18）。また、それらとは異なるスタイルの行商人も描かれており、大原女や桂女はその代表例といえる（甲\_左\_3\_26、図19、甲\_左\_3\_75・甲\_左\_3\_76、図20）。ただ、描かれている商品は、かわらけや茶筌、魚など限定的であり、常設店舗による販売ほど多種多様な商品は描かれていない。

### 3-3. 職人

商人と比較すると、描かれている職人の数はかなり少なくなる。データベースによる検索でも4例しか見つからず（甲\_右\_6\_118、図21など）、検索結果に上がってこない例（甲\_右\_2\_112、図22など）を勘案しても、職人の数が商人の数を上回ることはない。これには、京都の繁栄の様子を、職人ではなく商人を中心として描こうとした制作者の意識が反映されているのではなかろうか。

## 4. おわりに

以上、非常に簡単で雑駁ではあるが、「歴博甲本」に描かれた商人と職人についてみてきた。特に新しい知見を提示することはできなかったが、一つだけ指摘をしておきたいのは、常設店舗で売り手として描かれている人物のほとんどが女性である一方、行商では、大原女や桂女を除くとその全てが男性を売り手として描いているという点である。

実際には、大原女や桂女以外にも、行商人のなかに女性もいたことが指摘されている<sup>29</sup>。そのため、「歴博甲本」の情景が全くの事実通りに描かれたものとはいえないのであるが、おおよその傾向は捉えて描いているのではなかろうか。

また、女性が構成員にみられる、あるいは女性ばかりで構成されていた座もあったことは、先学も指摘するところである<sup>30</sup>。もちろん売り手がみな座の構成員というわけではなかろうが、「歴博甲本」に描かれた女性の売り手の多さは、中世京都の商業において女性が販売業の中心にいたこと

を示しているといえるであろう。

ただ、繰り返しになるが、「歴博甲本」に当時の状況がそのまま描かれているわけではない。特に「歴博甲本」のように、その制作目的が政治的な場合には、商人や職人についてどこまで現実に忠実に描いているか判断が難しい。しかしこれまで掲げた図版をみてもわかるように、その描き方は詳細で、制作者は京都の都市の姿にもある程度気を配って描写していたとみてよいのではないか。

これまで「歴博甲本」については様々な研究がなされてきたが、今回使用した人物データベースの活用により、新たな成果が生み出されることを期待しつつ、拙い本稿を閉じたい。

#### 注

- 1 豊田武「商人の種々相」（同『中世の商人と交通』吉川弘文館、1983年、初出1949年）、同「日本中世の市場および座」（同『座の研究』吉川弘文館、1982年、初出1943年）など。
- 2 脇田晴子「座の性格変化と本所権力」（同『日本中世商業発達史の研究』御茶の水書房、1969年）など。
- 3 天文17年（1548）8月22日付下京四府駕輿丁米座中申状案（『賦引付并徳政方』（桑山浩然校訂『室町幕府引付史料集成』下巻、近藤出版社、1986年））。
- 4 『大乘院寺社雑事記』（『増補続史料大成』）寛正6年（1465）6月16日条。ただしこの事例は、単なる常設店舗商人と振売の対立ではなく、常設店舗商人が行商も行ったことにより起きた争論であり、興味深い。
- 5 綿貫友子「中世の都市と流通」（榎原雅治『一揆の時代』吉川弘文館、2003年）など。
- 6 桜井英治「中世職人の経営独占とその解体」（同『日本中世の経済構造』岩波書店、1996年、初出1987年）。
- 7 桜井英治「中世の技術と労働」（『岩波講座日本歴史』9、岩波書店、2015年）。
- 8 たとえば中世都市の研究は、越前朝倉氏の本拠地であった一乗谷の発掘を契機として急速に進展した（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『特別展 戦国城下町研究の最新線』（同館、2001年）など）。また、平成2年（1990）から同27年（2015）まで19回にわたって開催されていた「考古学と中世史」シンポジウムで報告された数々の研究成果は、考古学の成果が、文献史料からは知り得ない情報を豊富に有するものであることを示している。
- 9 中島圭一研究代表『中世を終わらせた「生産革命」—量産化技術の広がりと影響—』平成23年度～26年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書（課題番号23320143）。中島は、15世紀にみられた生産技術の進歩が政治や社会の中世的構造を解体し、近世的構造への転換を促す基盤となったとみている。
- 10 藤原重雄「画像資料と歴史研究・叙述・教育」（『岩波講座日本歴史』21、岩波書店、2015年）、128頁。
- 11 たとえば前掲注1豊田論文においても、商家を説明する際に参照されている（「商人の種々相」、61頁）。
- 12 『洛中洛外図大観 町田家旧蔵本』（小学館、1987年）。
- 13 豊田武「都市および座の発達」（前掲注1同著書『座の研究』）所収、初出1948年）。
- 14 「職人」について桜井英治は、芸能民一般までも広く「職人」とみなす向きもあるが（網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店、1984年）、「賃金仕事・請負仕事を基本的経営形態とする手工業者」と規定した方が当時の現実に沿っていると主張している（前掲注6桜井論文、34頁）。桜井の見解に従いたい。
- 15 高橋康夫「室町期京都の空間構造と社会」（桃崎有一郎・山田邦和編著『室町政権の首府構想と京都一室町・北山・東山—』（文理閣、2016年））所収、初出1998年）。ただし同論文によれば、それは実態に即したもので、室町幕府は九条通を南限と考えていたという。
- 16 洛中は、二条通を境として上京と下京に分かれる。
- 17 これは武田恒夫が京都国立博物館編『洛中洛外図』（角川書店、1966年）において提唱したものである。
- 18 大塚活美「洛中洛外図屏風歴博F本の位置づけについて」（『国立歴史民俗博物館研究報告』180、2014年）。
- 19 『実隆公記』（続群書類従完成会）永正3年（1506）12月22日条に、「越前朝倉<sup>(貞隆)</sup>屏風新調、一<sup>(貞隆)</sup>双画京中、土佐<sup>(貞隆)</sup>刑部大輔新図、尤珍重之物也、一見有興、」とある。
- 20 小島道裕『描かれた戦国の京都 洛中洛外図屏風を読む』（吉川弘文館、2009年）。  
なお制作者については、狩野元信周辺の狩野派絵師が描いたとする見方が長らく定説の位置を占めていたが、近年黒田日出男は、「歴博甲本」の伝来の検討から、土佐光信周辺の土佐派絵師が描いたものと主張している（黒田「初期洛中洛外図屏風の伝来論—将軍に献上された土佐筆と狩野元信筆の洛中図屏風」『立正大学文学部研究紀要』27、2011年）。しかしその見方に対しては小島道裕が反

- 論しており（小島「洛中洛外図屏風歴博甲本の制作事情をめぐって」（前掲注18書所収）、黒田が自説の根拠とした史料について黒田から問い合わせを受けた野田浩子も、その史料の記述の不正確さを論じ、黒田説を批判している（野田「井伊直孝拝領の洛中洛外図一歴博甲本の伝来論によせて一」『彦根城博物館研究紀要』26、2016年）。
- 21 拙稿「洛中洛外図屏風歴博甲本人物データベース各項目の立項方法と入力語」（前掲注18書所収）。
- 22 「洛中洛外図屏風「歴博甲本」人物データベース」（[http://www.rekihaku.ac.jp/rakuchu-rakugai/DB/kohon\\_research/kohon\\_people\\_DB.php](http://www.rekihaku.ac.jp/rakuchu-rakugai/DB/kohon_research/kohon_people_DB.php)）。筆者はこのデータベース構築に携わった者の一人である。なお、当初は甲本のみを対象としたものであったが、上記ホームページを閲覧した時点（平成29年（2017）1月12日）では、国立歴史民俗博物館が所蔵する甲本以外の第一定型の洛中洛外図屏風（歴博乙本）についても、データベース検索ができるようになっている。
- 23 データベースでは、「『洛中洛外図屏風』の種類」\_〈隻〉\_〈扇〉\_〈その扇内での順番〉という表記で各人物に付番している。
- 24 これはデータベースの基となる資料を作成した筆者の落度である。できるだけ早急に検討し直したい。
- 25 こうした暖簾については、齊藤研一「描かれた暖簾、看板、そして井戸一初期洛中洛外図屏風の図像一」（勝俣鎮夫編『中世人の生活世界』〈山川出版社、1996年〉所収）が詳細な検討を行っている。
- 26 高橋康夫「中世都市空間の様相と特質」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ・空間』〈東京大学出版会、1989年〉所収）。
- 27 前掲注12参照。
- 28 フリーワード検索で「売り歩く」と検索すると、23例となり、「振売」で検索した結果と多少異なる。この点も改善が必要であろう。
- 29 鈴木敦子「中世後期の経済発展と女性の地位」（同『日本中世社会の流通構造』〈校倉書房、2000年〉所収、1995年）。
- 30 前注など。



図2

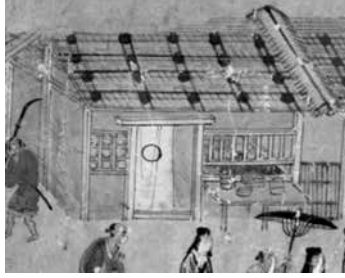


図3

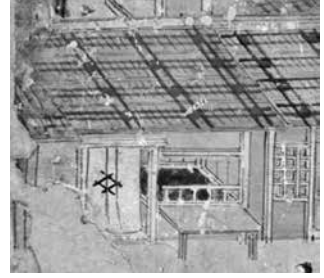


図4

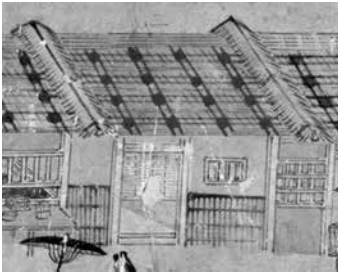


図5



図6

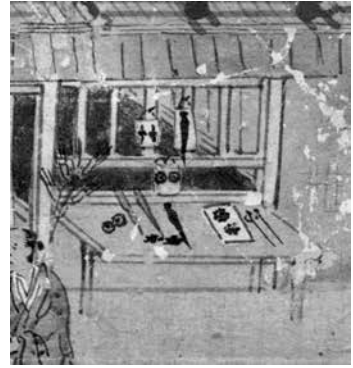


図7



図8

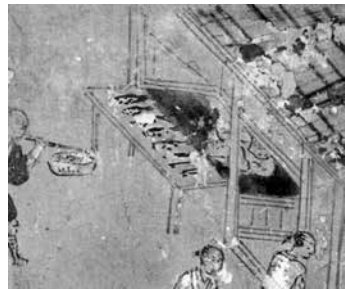


図9



図10

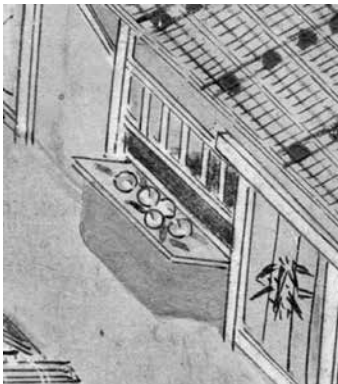


図11



図12



図13

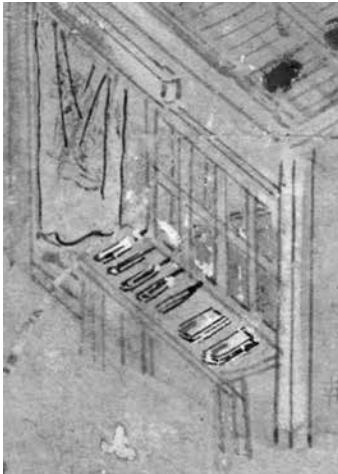


図14



図15



図16



図17



図18



図19



図20



図21



図22

「洛中洛外図屏風（歴博甲本）」は国立歴史民俗博物館所蔵であり、画像使用に際しては同館の許諾を得た。